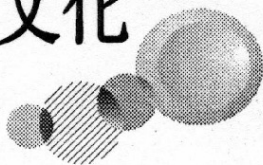


文化



わかまつ ひでとし
若松 秀俊

戦前、旧制松江高校(現島根大学)のドイツ語の講師として、十四年間にわたる教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ・カルシュ(Fritz Karsch)が亡くなって今年で三十年になる。いまやほとんど忘れられかけているが、人がどのようにものを認識するかということを考究する学問「人智学」を提唱したドイツの哲学者、シュタイナーを日本に紹介した人物でもある。二十一世紀を迎えて、日本を第二の故郷として愛したカルシュを顕彰する(一)とは日本だけでなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味があるのではないか。

松江での14年

カルシュは一八九三(明治二十六年)、ドイツ東部のプラゼビッツで生まれ、一九七一年(昭和四十六)年、カッセルで没した。大正十四年に松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、昭和十五年からは外交官として終戦まで東京で暮らした。松江

第二の故郷、日本を愛して

あるドイツ人哲学者のこと

選んだのはラフカディオ・ハーンの影響があったと思われ。その薫陶を受けた生徒の中には、「長崎の鐘」で知られる元長崎医科大学教授の永井隆博士、哲学者ののりこ、三元東大教授、池田内閣で自治相を務めた志澤正道氏などがいる。

一九二一(明治四十四)年、ドレスデンにおける国際博覧会で、「日本」の出会い、日本に強い興味を抱いた。第一次大戦に志願兵として従軍した後、軍隊を退き、マルブルク大学でニライハルトマン門下生として哲学を学び、一

九三(大正十二)年に哲学博士の学位を取得、人智学の研究組織に加わった。その後来日し、ドイツ語講師として松江市奥谷町の官舎に住む。そして一時帰国を挟んで、昭和十四年三月まで松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、昭和十五年からは外交官として終戦まで東京で暮らした。松江

九三(大正十二)年に哲学博士の学位を取得、人智学の研究組織に加わった。その後来日し、ドイツ語講師として松江市奥谷町の官舎に住む。そして一時帰国を挟んで、昭和十四年三月まで松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、昭和十五年からは外交官として終戦まで東京で暮らした。松江

の風景画が現在も二人の娘の手元に保存されている。また、当時の松江の貴重な写真を数多く残している。彼は生徒にヨーロッパの精神生活を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き、ライフワークである人智学にのみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残す。日本を深く愛し、日本人々を惹き込み、自分の持っている知識を惜しみなく生徒に伝

『カルシュ先生』(いずれも私家版)で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「嵩のふもと」でその人柄を生徒が語っている。

り、現在、米国に住む長女が整理中だ。その研究は有史以来、人の思考が、哲学とどのように関わり変化してきたのかを示すことであって、彼が大きな興味を抱いていた禅と西田哲学への入り口がやがて明らかになるはずである。西田幾多郎や鈴木大拙らは松江に住むカルシュを訪ねたらしい。

人智学の思考
カルシュは松江高校を離任した後、予備役将校であることから、親交があったドイツ大使オット氏の仲介で在日ドイツ大使館の武官補佐官として

学問や内的修練を通してシュタイナーが唱えた新しい思考に我々がいかんにして到達できるかを示すとした。ある人によれば、大部分の仕事はシュタイナーの哲学がいかにカ

興味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。描いた矢道湖、嫁が島、袖師が浦、大山、山陰の農村

えた。善書には「カントとハルトマンの比較論述」(日独文化協会、昭和三年)があり、その他ドイツに関する著書も

て昭和十五から二十年まで大使館に勤務するところとなり、そこで終戦を迎えた。未発表の研究は哲学者と人の意識の進化に関するものである。スイスのドルナッハの「ゲーテアナム」に収録された未刊行原稿は、後に家族のものに戻されている。解説困難な箇所が多いが、古代インド、中国、ギリシャの哲学から始まる一冊約四百、七十余のファイイル三十七冊にのぼ

ント哲学に勝るかを示そうとしたことになり、彼自身が自らを称して、行動的人智学者であり、シュタイナーの「精神科学」を世に広める教師であると言っている。娘たちは人智学の基本に関する影響を両親から受けた。後に長女は自らその研究を行い、次女は帰国後、ヴァルドルフ学校に通い、マルブルク大学で学んだ後、ヴァルドルフ学校の教師になった。

終戦二年後に帰国。一九六一(昭和三十)年には病気のため年金生活に入ったが、キリヌと共同体の古巣のカッセルに移住し、ライフワークである人智学的知識からみた東洋哲学史に専念した。昭和四十三年には、戦後も文通を続けていた、かつての生徒から招待を受け、二十一年ぶりに日本を訪問。各地を回って、多くの生徒たちと親しく過ごす時間を得た。この時、出雲大社で、至聖の神に直面する願いがかなえられ、ここで自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。一月月の滞在後、帰国した彼は金婚式を祝い、一九七一年、脳腫瘍のため亡くなった。七十八歳だった。



フリッツ・カルシュ氏

『カルシュ先生』(いずれも私家版)で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「嵩のふもと」でその人柄を生徒が語っている。

また、彼に關しては門下の酒井勝郎氏が『田舎の大学から』

彼は少年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺に見ることができたことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたという。(東京医科歯科大学教授)

東洋への傾倒